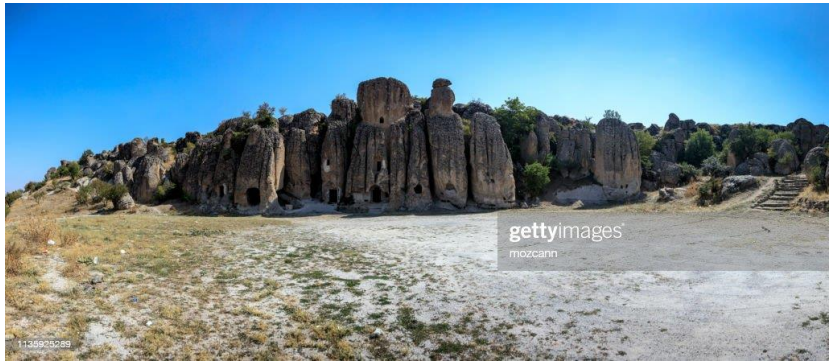

ルステラ、古代都市

2023 年 8 月 6 日　説教「生ける神に立ち返る」

使徒の働き 14 章 8～18 節

パウロとバルナバはイコニオムで宣教し、多くの信者が生まれましたが、ユダヤ人指導者たちが石打ちにしようとする企てを持っているのを知り、難を逃れて、ルステラやデルベへと向かったのでした。

１．立ち上がった足のなえた人（8～10 節）

①ルステラの足のなえた人（8）**「ルステラでのことであるが、ある足のきかない人がすわっていた。彼は生まれつき足のなえた人で、歩いたことがなかった。」**

ルステラはイコニオムから南に 40 キロほどの地。町は丘の上にあり、肥沃な平原に囲まれていました。その地に住む人々は、少数のローマ人が支配階級、教養のあるギリシャ人が第二階層。残りの大半は一般庶民のルカオニヤ人でルカオニヤ語を話していました。その町の片隅に、足のきかない人が、坐っていました。おそらくは物乞いをする目的だったのでしょう。彼は生まれつきの足なえで、歩いた事は一度もなく、町の人々が自由に歩くところを見て、羨ましいと思ったことは一度や二度ではなかったでしょう。

②耳を傾け（9）**「この人がパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、」**

この足のなえた人は、使徒パウロが話すことを聞き逃さないようにしていました。パウロは屋外の人が集まる所で話していたことがわかります。パウロは足なえの人の真剣な姿勢に注目し、この人は、神が癒し主であるという信仰をもっていると認めました。

③飛び上がり（10）**「大声で、『自分の足で、まっすぐに立ちなさい』と言った。すると彼は飛び上がって、歩き出した。」**

そこで、パウロは彼に向かって大声で命じたのです。「自分の足でまっすぐに立ちなさい!」。その権威ある言葉によって、足のきかない人は癒されました。そして飛び上がり、歩き出したのです。

２．人間にいけにえをささげようとする人々（11～13 節）

①群衆の叫び（11）**「パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、『神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ』と言った。」**

群衆とは、ルカオニヤ語を話す一般大衆でした。彼らは、パウロが足なえの男を立たせたのを見て、驚嘆しました。言うまでもなく、パウロは自らの力で癒したのではありません。ただ、神の恵みの力により、御霊に満たされて、それがなされたのです。しかし、癒しの様子を見た人々は、神々が人間の姿をとってこの癒しを実現したのだと考えました。

②ゼウス、ヘルメスと（12）**「そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。」**

そして、ギリシャ神話の神々になぞらえて、バルナバをゼウス、パウロをヘル

メスと呼んだのです。ゼウスはギリシャ神話の最高神。ヘルメスはゼウスの末子で、神々の使者、雄弁、音楽の神などとされていました。

③いけにえをささげ（13）**「すると、町の門にあるゼウスの神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとした。」**

この町の門にゼウスの神殿がありました。そこの祭司がなんと、雄牛数頭を花で飾り、門の前に携え、群衆たちといっしょに、いけにえをささげに来たのです。祭司が先頭をきってやってくるのですから、彼らがパウロとバルナバが、足なえを立たせたことに衝撃をうけたことがわかります。

３．むなしいことを捨てて（14～18 節）

①同じ人間（14～15）**「これを聞いた使徒たち、パウロとバルナバは、衣を裂いて、群衆の中に駆け込み、叫びながら、言った。『皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。』」**

しかし、使徒パウロとバルナバは群衆の中に駆け込んで、衣を裂いています。それは悲しみや怒りなどの表現ですが、ふたりは彼らのしていることは勘違いで、してはならないことであると、叫びました。使徒たちは、自分達も同じ単なる人間だと強く語りました。そして、人間を礼拝することは、むなしいことであり、してはならないと伝えます。さらに、礼拝されるべきは、天地を造られ、生きておられる神で、自分たちはその方を宣べ伝えているのだと叫びました。

②ご自分を明らかにされた神（16~17）**「『過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくてくださったのです。』」**

パウロは世界の歴史を振り返って、神を知らないで歩んできた国の人々の営みも神の許容のなかにあったことを述べます。しかし、だからといって、神は全く御自身を明らかにされていないわけではなく、どの国の民にも恵みの雨を降らせ、実りの季節を与えて、食事を得させて下さり、生きる喜びを与えて、ご自分の存在を伝えてこられた、というのです。

②いけにえを捧げることを断念（18）**「こう言って、ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた。」**

ここまでパウロが話すと、群衆もようやくのことで、パウロとバルナバにいけにえをささげることをやめたのでした。

《結論》

まずは、福音書と使徒の働きから二つの例を挙げます。

キリストは 38 年もの間、病気にかかり、歩くのもままならずにベテスダの池の近くにいた人に、「起きて、床を取り上げて歩きなさい」（ヨハネ 5:8）と命ぜられました。すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出しました。

ペテロとヨハネは、宮の「美しの門」という名の門に置いてもらっていた、生まれつき足のなえた人に施しを求められました。ペテロはそれに対し、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言いました。すると、その人の足とくるぶしは強くなり、踊りあがってまっすぐに立って、歩き出したのでした（使徒 3:7～8）。

上の二つの歩けなかった人がいやされた例の違いは、言うまでもありません。イエス・キリストは御自身の御業としてこれをなさっていますが、ペテロはキリストの御名によって、いやしの御業に関わらせていただいているのです。

今朝の聖書箇所の、パウロが足のなえた人を立ち上がらせた出来事も、神の恵みのうちに、神の御力によって、パウロが器として用いられ、立ち上がりへと導かれたのです。ペテロの働きと同じです。

ところが、出来事を見た人は、非常に驚きました。おそらく私たちが現場にいても、イエス・キリストの癒しと使徒たちの癒しの違いを見分けることはできないでしょう。ペテロが「イエス・キリストの名によって歩け」と言った言葉を注意深く聞いていれば間違わないかもしれませんが、概して人間はすごい事が起きると、関わった人間に注目するのではないでしょうか。そして、今回の場合は、ルステラのゼウス神殿の祭司と群衆は、雄牛などを携えて、いけにえをささげて、パウロたちを礼拝しようとしたのです。使徒達はあわてて、「私たちもあなたと同じ人間です！ こんなことをしてはいけません。こうしたことはむなしいことです。私たちは、天地万物を造られた生ける神に立ち返るように福音宣教している者たちなのです」と叫んだのでした。

それでは、ここでパウロが言う「生ける神」とはどういうことですか。生きて働かれる神ということでしょう。天地を造られた神は、創造されただけではなく、その後もずっと人々の歩みに関わってくださる主です。 エレミヤは、あやまって崇められている神々は「木工で造られたもの。銀と金で飾られ、釘などで打ち付けられる。歩けないので、運んでやらなければならない。」としています。まさにパウロがいうように、それらはむなしいものなのですが、つい崇めやすいのです。「天地を造らなかった神々は、地からも、天の下からも滅びる」（エレミヤ書 10 章）と手厳しいのです。そして、「主はまことの神、生ける神、とこしえの王」（10:10 と告白するのです。

生ける神をそっちのけにして、凄い事をする人に心を預けてしまう誘惑を退けましょう。また、信用できるのは自分だけとし、自分自身に頼る愚に陥らないように気を付けましょう。自分という存在があてにならない者だということを認めましょう。自分を含めた人に頼ることなく、生ける神に立ち返りましょう。

それでは生ける神は、どのような人に働きかけてくださいますか。①病気の人、弱っている人。②謙虚な人、神の前にへりくだった人。③信仰のある人。ルステラの足のなえた人には、御言葉を聞く謙虚な心、神の癒しを信じる心がありました。そこに目が留められたのです。私たちも生ける神の前に、謙虚な信仰を与えられて、主の癒しにあずかっていきましょう。